

アラビア半島の新石器化

—サウジアラビア北西部、マスイューン遺跡の第4次発掘調査とフマイイット遺跡の第1~2次発掘調査(2024)—

藤井 純夫	金沢大学古代文明・文化資源学研究所客員教授
久米 正吾	金沢大学古代文明・文化資源学研究所客員研究員
安倍 雅史	東京文化財研究所文化遺産国際協力センター保存計画研究室長
足立 拓朗	金沢大学古代文明・文化資源学研究所教授
野口 淳	公立小松大学次世代考古学研究センター特任准教授

Neolithization in the Arabian Peninsula: Excavations at Masyoon and Humayyit, Northern Hijaz (2024)

FUJII, Sumio	Visiting Professor, Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University
KUME, Shogo	Visiting Researcher, Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University
ABE, Masashi	Head, Conservation Design Section, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
ADACHI, Takuro	Professor, Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University
NOGUCHI, Atsushi	Project Professor, Special Commissioned Associate Professor, Research Center for Next Generation Archaeological Studies, Komatsu University

1. はじめに

2012年1月の事前踏査、同12月の分布調査に始まった金沢大学サウジアラビア遺跡調査団の活動は、紅海沿岸のワディ・シャルマ遺跡群から、内陸グライヤ平原のワディ・ムハラック、ワディ・グバイ遺跡群、さらに内陸のサフワーン遺跡群へと順次移動し、2022年からは北ヒジャーズ地域のワディ・フマイイット遺跡群に注力している(図1)。本稿では、2024年度に実施した二つの調査—先土器新石器時代B前・中期(以下、PPNB前・中期)の小型集落遺跡、マスイューン(Masyoon)の第4次最終発掘調査と、後期新石器時代の集落・祭祀複合遺跡、フマイイット(Humayyit)の第1次・2次発掘調査—について報告する。

2. マスイューン遺跡の第4次調査

マスイューン遺跡は、ヒジャーズ山脈北部の最高峰、ロウズ山(Jabal Lowz)の東側山麓に広がる花崗岩丘陵と、この地域の主要水系であるワディ・フマイイットとに挟まれた緩斜面の下端に位置し(図1)、その面積は約0.3~0.5haと推定される。この遺跡は、1970年代後半から実施された国家規模の広域分布調査(Comprehensive Archaeological Survey Program)によって確認され、その表採遺物から新石器時代の遺跡と同定された(Ingraham et al. 1981)。後に再踏査し

たサウジ文化省調査団も、同じ見通しを述べている(Al-Ansary et al. 2002)。金沢大学サウジアラビア調査団も活動当初からこの遺跡に着目し、数回の短期踏査を重ねてきた。発掘は、2022年の12月に始まった(藤井他 2024)。

2024年の5月に実施した第4次最終調査では、遺跡南半に3つの新たな発掘区を設け、集落の全体像を探った。その結果、従来の調査で判明していた2種の遺構群のうち、蜂の巣状遺構群は集落の北半に、半円形ワークショップ遺構群は南半に、それぞれ集中していることが判明した。加えて、前者では半地下住居の床深が徐々に浅くなると同時に、各遺構間の距離が次第に拡大し、密集型から緩やかな連結形へと変化していることが確認された(図2-1、2)。一方、後者は単独のものが多く、稀に連結する場合も2件以上の事例は認められなかった(図2-3)。

遺跡南北での変化は、遺物でも確認された。打製石器では、PPNB前期の指標である円盤型の対向打面石核とヘルワン型尖頭器の組み合わせから、同中期以降に特徴的なナヴィフォーム型石核と大型尖頭器(アムク型・ビブロス型・ジェリコ型を含む)の組み合わせへの変化が認められた(図2-4)。この事実は、この集落がPPNBの前期から中期初頭まで継続して住まわれたことを示唆している。後述するように、¹⁴Cのデータもこれを裏付けている。

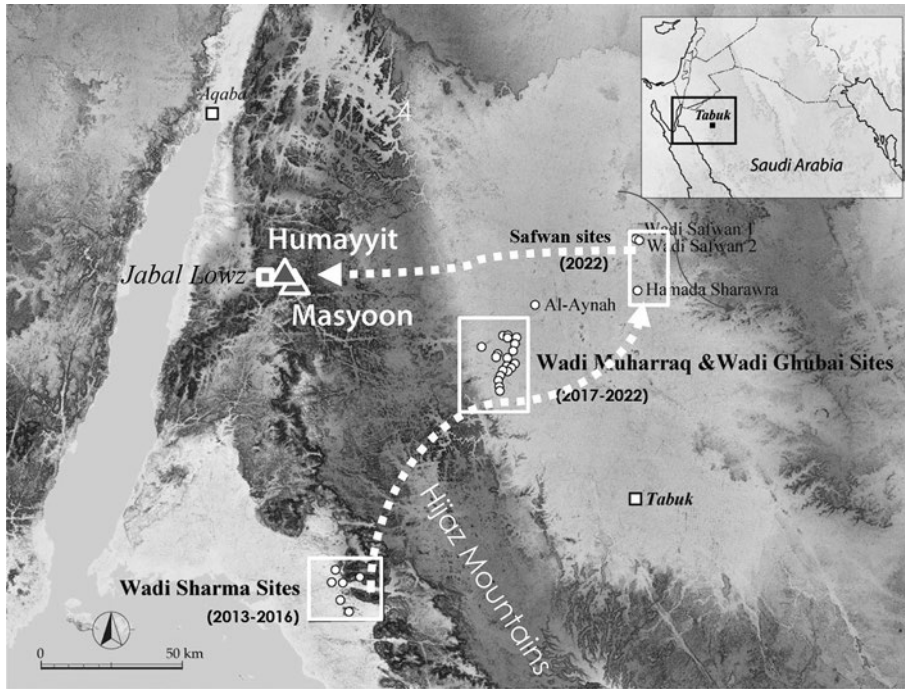


図1 マスィユーン遺跡とフマイイット遺跡：地理的位置

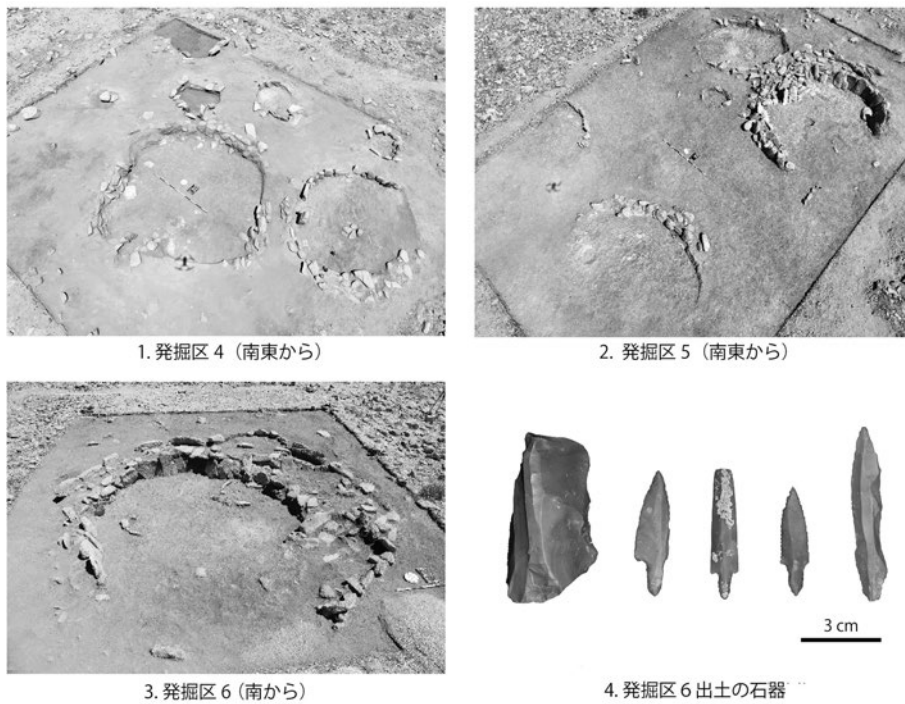


図2 マスィユーン遺跡：発掘区4～6と出土遺物

3. フマイイット遺跡の第1～2次調査

この遺跡は、マスィユーン遺跡の北西約1kmのワディ段丘上に位置し、面積は約1.5haである。2種の遺構群が確認された。一つは、祭祀用の遺構群である。そのうち遺構群IとIIは、二列の曲線的な石壁と環状の小遺構を組み合わせたものを基本単位として、こ

れを10数基横方向に連ねた構造であった(図3-1、2)。遺物は出土しなかった。遺物のない均質なユニットの横連結は、南レヴァント周辺乾燥域の後期新石器時代遊牧民に特徴的な「擬集落」に共通している。これに対して、遺構群Vは直径約3～5mの環状遺構を連結しており、床面の中央付近には大型の立石を配していた。やはり遺物はなかった。

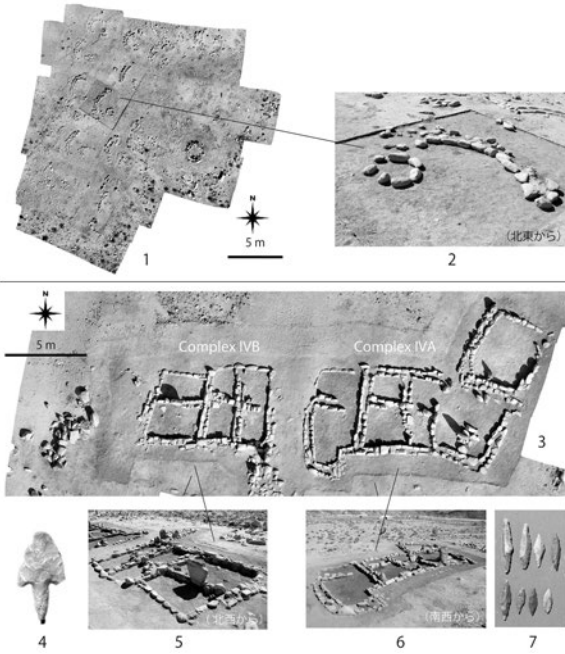


図3 ファイット遺跡：祭祀遺構群(上)と居住遺構群(下)

一方の住居遺構群は、1件の「田の字」型遺構と3件(または1件)の矩形単室遺構をL字型(またはI字型)に組み合わせた4室(または2室)構造で、遺跡の中心部に集中していた(図3-3、5、6)。技術的には、(祭祀遺構と同様に)2列の石積み壁が特徴である。遺構群IIIは単独の、遺構群IVは一对の遺構群で構成されていた。これらの遺構群からは打製石器や磨製石器・石製品などが出土した。前者には、後期新石器時代の指標であるハパルサ型・ヘルツィリア型石鏃などが含まれていた(図3-4、7)。後者は、石臼・摺石、矢柄研磨器などを含んでいた。なお、マスイユーン遺跡で多量に出土した装身具は、ほとんど見られなかった。後期新石器時代の矩形住居遺構群は、ヒジャーズ地方は無論のこと、南レヴァント周辺の乾燥域全体でも稀であり、注目される。

4. 考察

ワディ・シャルマ1(2013~2015年)、マスイユーン(2022~2024年)、ファイット(2024年)と断続的に続いた新石器時代集落の調査によって、ヒジャーズ北部地域における新石器化プロセスの全体像が見えてきた(図4)。その冒頭を飾るのが、マスイユーンの小型集落である(Fujii et al. 2023a, 2023b)。¹⁴C年代測定値は、同集落がPPNBの前期から中期初頭にかけて持続したことを示唆している。尖頭器の型式から見て、ジャバル・カッター101遺跡も前期にまで遡るもの

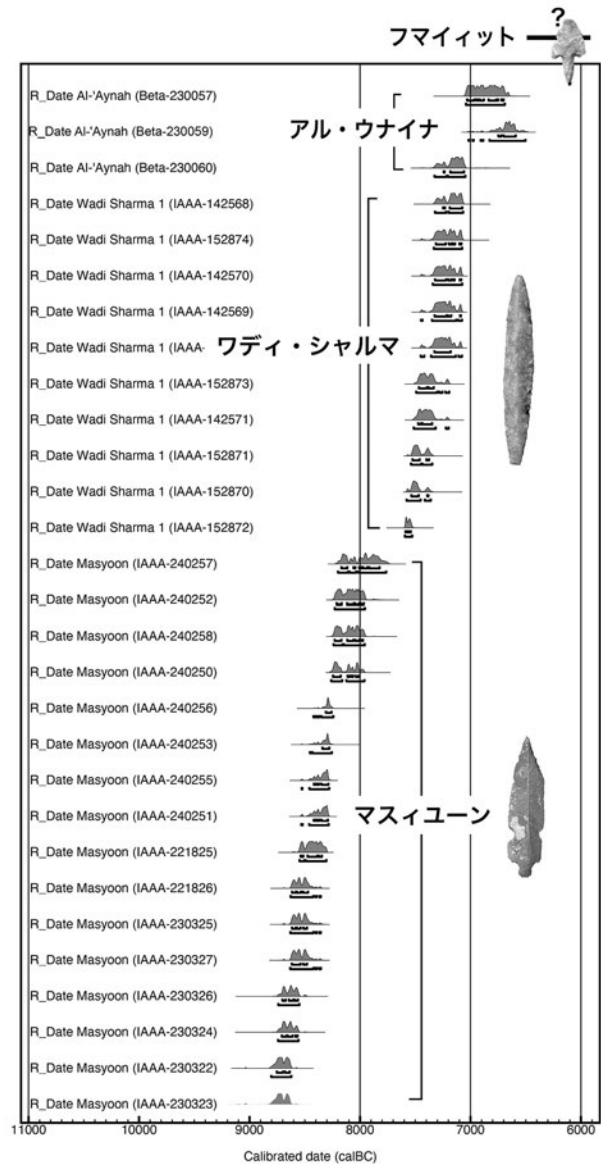


図4 北ヒジャーズ地域の新石器時代編年

と考えられる(Crassard et al. 2013)。大きな断絶なくこれに続いたのが、ワディ・シャルマ1の集落である(Fujii et al. 2021)。この集落は、後期まで持続した。グライヤ平原で試掘されたアル・ウナイナ(Al-Unaynah)も後期の集落遺跡と考えられる(Al-Asmari 2012)。1930年代に踏査されたキルワや(Kilwa; Rotherert 1938)、近年調査が始まったアッ・アサフィール(As-Asafir)なども、これと同時期の集落であろう。ファイットは、これらに続く後期新石器時代の集落・祭祀複合遺跡である。ヒジャーズ北部の新石器化プロセスはこれらの遺跡を通してほぼ完全に見通すことができようになった。これが、一連の調査の最大の成果である。

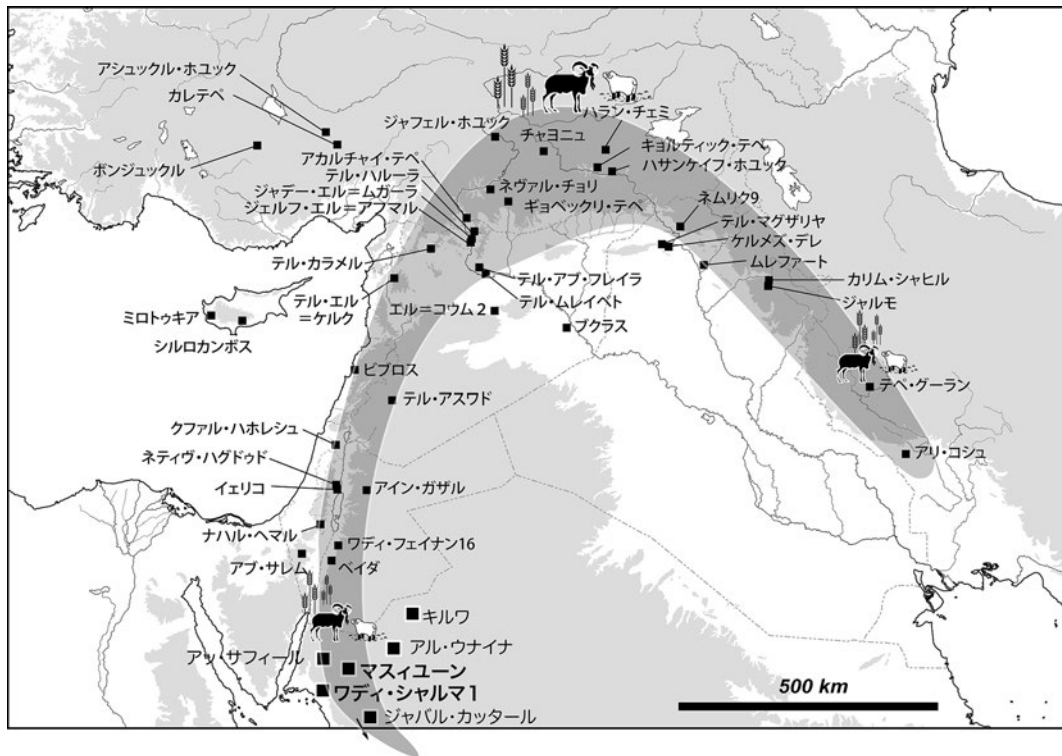


図5 「肥沃な三日月弧」の南西隅(西アジア考古学講義ノート編集委員会 2013 の図 1.5.2 に加筆)

5. まとめ

先土器新石器文化 A (PPNA) の遺跡こそ確認されていないものの、ヒジャーズ北部地域では、PPNB 前期から後期新石器時代までの約 3000 年にわたる新石器化の経緯をほぼ隙間なく追跡できる。この事実は、「肥沃な三日月弧」の西翼が、ヨルダン南部を超えて、はるかヒジャーズ地方の北部にまで伸びていたことを意味している(図 5)。ただし、そこでの集落が実際に農耕牧畜を伴っていたかどうかは、まだ分かっていない。この点の検証が、今後の課題である。

■参考文献

- ・西アジア考古学講義ノート編集委員会(2013)『西アジア考古学講義ノート』日本西アジア考古学会。
- ・藤井純夫・久米正吾・安倍雅史・足立拓朗・岡崎健治(2024)「アラビア半島の遊牧化—サウジアラビア北西部、マシユーン遺跡の第1～3次発掘調査(2022-2023)—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』144-149頁、日本西アジア考古学会。
- ・Al-Ansary, A. T., al-Rashid, S. A., Ghabban, A. I., al-Saud, A., Escoubi, K. M., and Khan M. (2002) *Al-Bid': History and Archaeology*. Deputy Ministry of Antiquities and Museums, Ministry of Education, Kingdom of Saudi Arabia.
- ・Al-Asmari, K. F. (2012) *Oyaynah Archaeological Site: The Study*

of Neolithic Period Northwest of Saudi Arabia. University Thesis Series No. 279. Riyadh: King Abdul-Aziz Publication. (in Arabic)

- ・Crassard, R., M. D. Petraglia, A. G., Parker, A. and eleven other co-authors (2013) Beyond the Levant: First evidence of a Pre-Pottery Neolithic incursion into the Nefud Desert, Saudi Arabia. *Plos One*, 2013, 8/7: e68051.
- ・Fujii, S., al-Mansoor, A. A., Adachi, T., al-Khalifa, K. A. and Nagaya, N (2021) Excavations at Wadi Sharma 1: New insights into the Hijaz Neolithic, north-western Arabia. M. Luciani (ed.), *The Archaeology of the Arabian Peninsula 2: Connecting the Evidence*, 15-41. Vienna: Austrian Academy of Sciences.
- ・Fujii, S., Almunif, A. I., Kume, S. and seven other co-authors (2023a) Archaeological Investigations at Masyoon (NW Arabia): A Brief Report of the First Two Preliminary Seasons. Unpublished field report submitted to the Heritage Commission, Ministry of Culture, The Kingdom of Saudi Arabia.
- ・Fujii, S., Almunif, A. I., Kume, S. and three other co-authors (2023b) Masyoon, the earliest Neolithic settlement in the Arabian Peninsula: A brief report of the third field season, May/June 2023. Unpublished field report submitted to the Heritage Commission, Ministry of Culture, The Kingdom of Saudi Arabia.
- ・Ingraham, M. L., Johnson, T. D., Rihani, B. and Shatla, I (1981) Comprehensive archaeological survey program: Preliminary report on a reconnaissance survey of the northwestern province (with a note on a brief survey of the northern province), *Atlat* 5: 59-84.
- ・Rothert, H. (1938) *Transjordanien: Vorgeschichtliche Forschungen*, Stuttgart.